



古代寺院出土軒先木口金具

大官大寺金堂出土金具（左）およびX線透過画像（右上）：大官大寺金堂から出土した闊木所用と考えられる軒先木口金具。X線透過画像では、大小多数の空隙が分布し、部分的に集中する様子が確認できる。（左写真・撮影：栗山雅夫）

薬師寺金堂前庭出土金具の走査電子顕微鏡画像（右下）：薬師寺金堂前庭から出土した飛檐垂木所用と考えられる軒先木口金具のSEM画像。金アマルガム粒子が集合する様子とともに、凹凸を均した加工痕跡が確認できる。

本文6頁参照

ブータン王国の伝統的民家の調査

ブータン王国は中国チベットとインドに挟まれた山あいの小国で、谷筋に集落が広がる。写真は1955年まで同国の首都であったブナカ周辺の集落に残る伝統的な民家で、土を突き固めた版築による壁で囲われ、1階を家畜小屋として2階に入口を設けている。本文10頁参照（撮影：海野 聰）



図版 2



飛鳥寺塔心礎出土 金・銀製品

1957年に飛鳥寺塔心礎から出土した様々な遺物は、推古天皇元年(593)におこなわれた舍利埋納儀礼の実態を考える上で欠くことのできない資料である。今回、金・銀の延板と粒について再調査をおこなった結果、形状や材質からいくつかのグループに分かれることがあきらかとなった。

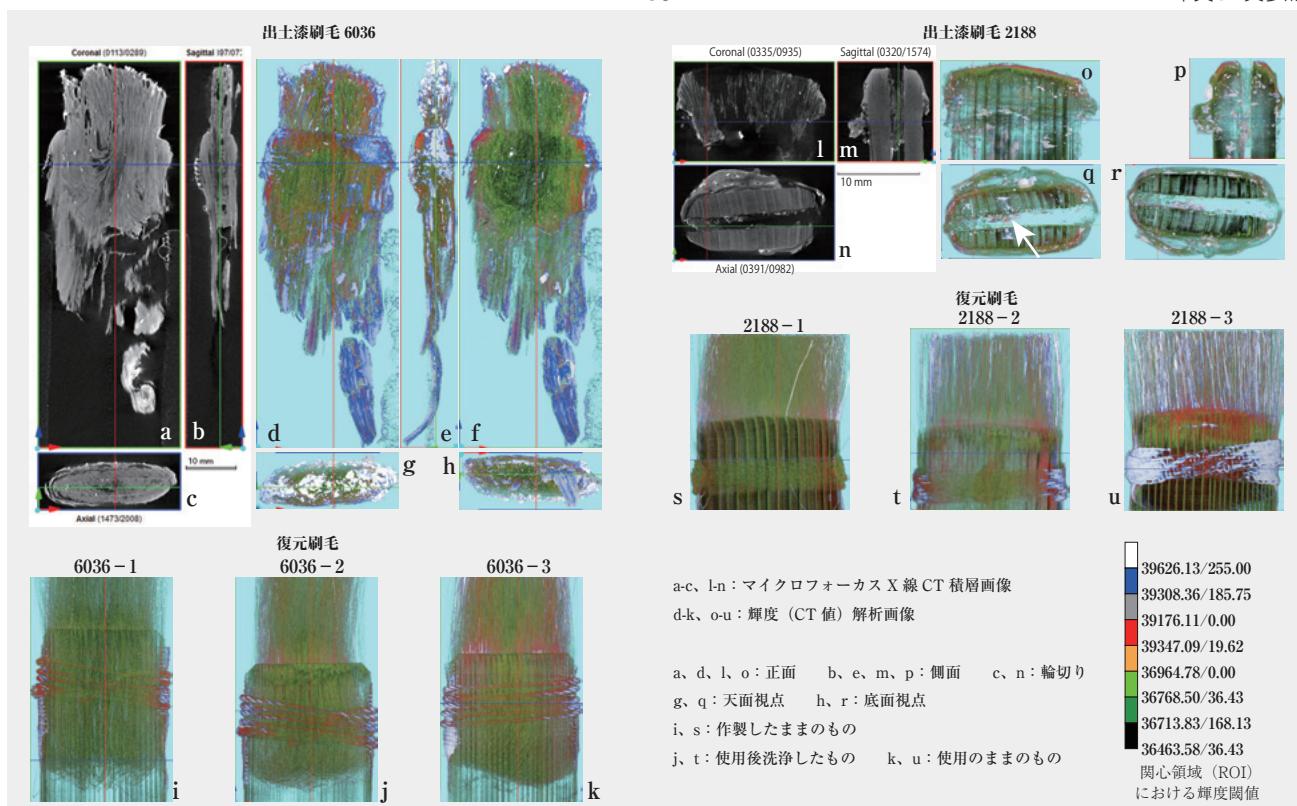
本文54頁参照 (撮影:栗山雅夫)

平城宮・京跡出土漆刷毛とその復元刷毛の立体構造輝度解析

6036(左):毛先や毛の外側、緊縛用紐付近を中心に密度の高い物質が付着していることがわかる。復元刷毛の場合、漆塗りに使用した刷毛において密度の高い付着物がやや類似して分布する傾向がみられた。

2188(右):毛部分がほとんど遺存していないが、天面視点からみられる毛の残存部分(矢印)には密度の高い付着物がみられる。復元刷毛では、漆塗りに使用した刷毛において密度の高い付着物の分布がi~kの場合よりも毛先や毛の外側、さらに緊縛紐外面で顕著であり、出土刷毛とより類似する傾向を示している。

本文62頁参照



石神遺跡南北溝SD640出土土器

(石神遺跡第4次)

SD640は石神遺跡の東半部で検出した基幹排水路と考えられる南北溝で、飛鳥IVに位置づけられる土器が大量に出土した。大口径の杯類を多く含むとともに、多法量的様相を示す。尾張産須恵器が高い比率を占めることも本土器群の特徴である。

本文146頁参照 (撮影: 栗山雅夫)

山田寺北面大垣の調査

(飛鳥藤原第188-11次)

史跡地北端隣接地の法面改修工事にともなう調査。北面大垣の柱穴列と大垣廃絶後の瓦組暗渠4条を検出した。大垣の柱穴は新旧2時期分を確認、瓦組暗渠は築地壍改作にともなう可能性がある。北西から。本文102頁参照 (撮影: 栗山雅夫)



図版 4



山田道の調査（飛鳥藤原第193次）

調査区全景。山田道南側溝とみられる東西溝や掘立柱塀、飛鳥時代前半の整地にともない削平された古墳時代の竪穴建物などを検出した。北から。

本文110頁参照（撮影：栗山雅夫）



山田道側溝と竪穴建物

(下左) 東西溝SD4520と想定される山田道。古代の山田道における道路幅は、現在の県道よりも広かったことがわかる。中央奥にみえるのは雷丘。東から。

(下右) 古墳時代前期の竪穴建物SI4530。床面から布留2式の土師器が出土した。中央部を飛鳥時代前半の斜行溝SD4540により大きく壊される。西から。

（撮影：栗山雅夫）

山田道の調査

(飛鳥藤原第194次)

調査区全景。古墳時代後期から飛鳥時代前半にかけて人為的に築造され、飛鳥時代後半に埋め立てられた池状遺構SG4550を全域で確認した。その埋め立ては、工程途中に掘立柱建物や排水溝、しがらみを設置するなど、複数の作業単位が認められた。東から。

本文110頁参照（撮影：栗山雅夫）



木質遺物集中部としがらみ列

(下左) 池状遺構SG4550の下からは古墳時代前期の木質遺物集中部SU4555を検出した。布留2式の土師器とともに弓、刀形、刀鞘といった武器や農具、建築部材などが出土した。南東から。

(下右) 池状遺構SG4550の埋め立て途中に設けられた南北しがらみ列SX4553。不定間隔に打ち込んだ杭の西側に葉の付いた粗朶を敷き、その後、杭間に小枝を編み込んでいる。南東から。

(撮影：栗山雅夫)

図版 6



平城宮東院地区の調査（平城第584次）

調査区全景。調査地は平城宮東院地区の西北辺に位置する。奈良時代前半の南北棟建物2棟を並んで検出したほか、隣接する調査区から続く奈良時代後半の建物群や、石列・溝などを確認した。南東から。

本文170頁参照（撮影：杉本和樹）



第584次調査区東部の奈良時代整地土上面。調査区東部は後世の削平が比較的軽微であり、奈良時代の整地土層が残っていた。写真中央には検出した東院3期の溝3条が南北に走っている。南から。

（撮影：栗山雅夫・鎌倉綾）

奈良時代後半（東院3期）の溝SD19972～19974検出状況。調査区東南部の整地土上において、重複する溝3条を検出した。これらの東辺は、南の第530次調査区で検出した壇上遺構SX19570の東辺と一致する。北東から。

（撮影：栗山雅夫・鎌倉綾）





平城宮東院地区の調査（平城第593次）

第584次調査区の北に調査区を設定した。調査区南部で奈良時代前半の東西棟建物SB19999を検出し、調査区北部では奈良時代後半の大型井戸SE20000とそこから派生する溝SD20010～20013と覆屋SB20015を検出した。北西から。

本文183頁参照（撮影：飯田ゆりあ）

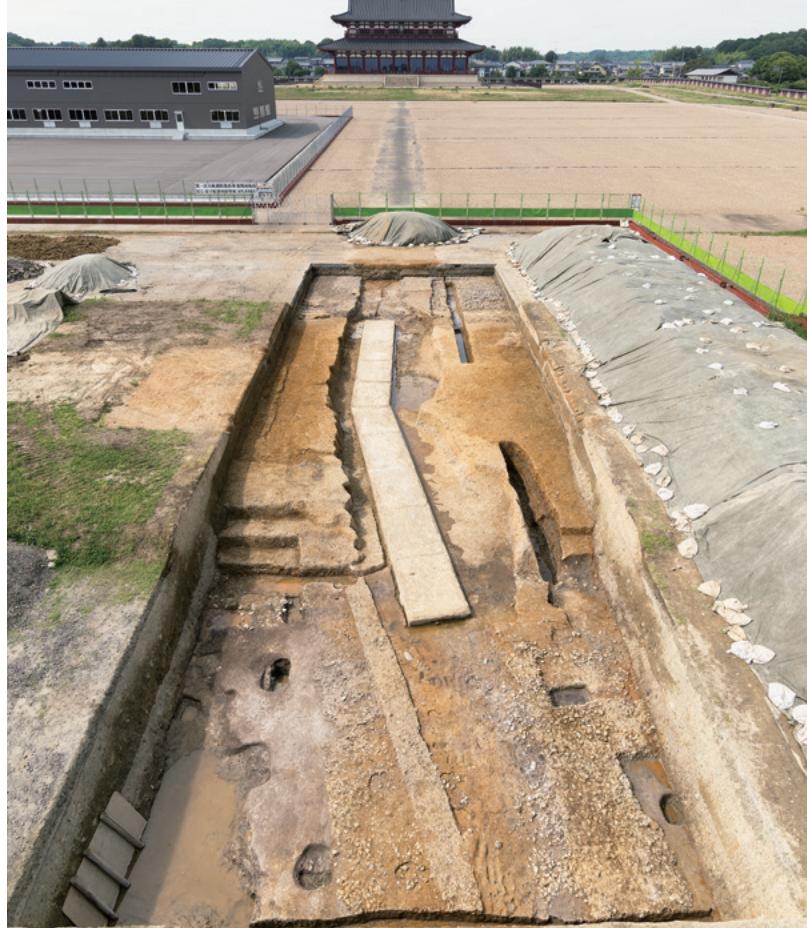


井戸SE20000

井戸SE20000は方形の井戸枠掘方を中心に配置し、その周囲に石組溝SD20001～SD20005と整地による作業面（SX20006）を設けている。廃絶後の解体・抜き取りが著しいが、円形の井戸枠抜取穴を検出した。北から。

（撮影：飯田ゆりあ）

図版 8



平城宮第一次大極殿院周辺の調査

(平城第585次)

Kトレーニング全景。調査地は平城宮第一次大極殿院南門の南北中軸線上にあたる。南門基壇土や階段痕跡のほか、大極殿院・中央区朝堂院双方の内庭部に広がる礫敷面を検出した。また、下層には敷粗朶層が展開することを確認した。南から。

本文198頁参照（撮影：中村一郎・飯田ゆりあ）



Fトレーニング全景。調査地は西面回廊南端付近および大極殿院内庭部にあたる。写真奥が回廊基壇土。調査区北壁の土層観察により、西面回廊基壇が掘込地業をともなうこと、その下層に大規模な造成土層が展開することを確認した。南東から。

本文200頁参照（撮影：中村一郎）



東大寺東塔院跡の調査（平城第589次）

東塔院南門・南面回廊基壇。基壇の高まりに北雨落溝が沿う。この北雨落溝からは多量の瓦が出土しており、廃絶時の様子が伺える。奥には南大門の屋根が見える。北東から。

本文224頁参照（撮影：中村一郎・鎌倉綾）